

貯法：密閉容器に保存。
使用期限：外箱に記載

劇薬、向精神薬、習慣性医薬品^{注1)}
処方せん医薬品^{注2)}

注 1)：注意—習慣性あり
注 2)：注意—医師等の処方せんにより
使用すること

催眠・鎮静剤、抗てんかん剤

日本薬局方

フェノバルビタール

Phenobarbital

日本標準商品分類番号

871125・871134

承認番号 16000AMZ00809

薬価収載 1955 年 10 月

販売開始 2008 年 4 月

再評価結果 1997 年 6 月

【禁忌】（次の患者には投与しないこと）

- (1) 本剤の成分又はバルビツール酸系化合物に対して過敏症の患者
(2) 急性間欠性ポルフィリン症の患者〔ポルフィリン合成が増加し、症状が悪化するおそれがある。〕
(3) ポリコナゾール、タダラフィル（アドシルカ）を投与中の患者
〔「3. 相互作用」の項参照〕

【組成・性状】

成分・含量 (1g中)	日本薬局方フェノバルビタール 1g
性状	白色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、味は苦い。

【効能・効果】

不眠症、不安緊張状態の鎮静、てんかんのけいれん発作
強直間代発作（全般けいれん発作、大発作）焦点発作（ジャクソン型発作を含む）
自律神経発作、精神運動発作

【用法・用量】

フェノバルビタールとして、通常成人 1 日30～200mgを1～4回に分割経口投与する。不眠症の場合は、フェノバルビタールとして、通常成人 1 回30～200mgを就寝前に経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

＜用法・用量に関連する使用上の注意＞

不眠症には、就寝の直前に服用させること。また、服用して就寝した後、睡眠途中において一時的に起床して仕事等をする可能性があるときは服用させないこと。

【使用上の注意】

1. 慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）

- (1) 高齢者（「5. 高齢者への投与」の項参照）
(2) 虚弱者、呼吸機能の低下している患者〔呼吸抑制を起こすことがある。〕
(3) 頭部外傷後遺症又は進行した動脈硬化症の患者〔本剤の作用が強くなりあらわれることがある。〕
(4) 心障害のある患者〔血圧低下や心拍数減少を起こすおそれがある。〕
(5) 肝障害、腎障害のある患者〔これらの症状の悪化、また血中濃度上昇のおそれがある。〕
(6) 薬物過敏症の患者
(7) アルコール中毒のある患者〔中枢抑制作用が増強される。〕
(8) 薬物依存の傾向又は既往歴のある患者〔精神依存及び身体依存を示すことがある。〕
(9) 重篤な神経症の患者〔依存を示すおそれがある。〕
(10) 甲状腺機能低下症の患者〔甲状腺機能の異常をきたすおそれがある。〕

2. 重要な基本的注意

- (1) 連用中における投与量の急激な減少ないし投与の中止により、てんかん重積状態があらわれることがあるので、投与を中止する場合には、徐々に減量するなど慎重に行うこと。なお、高齢者、虚弱者の場合は特に注意すること。
(2) 連用中は定期的に肝・腎機能、血液検査を行うことが望ましい。
(3) 連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、慎重に投与すること（「4. 副作用」の項参照）。
(4) 眠気、注意力・集中力・反射運動能力等の低下が起こることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させないように注意すること。

3. 相互作用

本剤は薬物代謝酵素 CYP 3 A 等の誘導作用を有する。

(1) 併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ポリコナゾール (ブイフェンド) <u>タダラフィル</u> (<u>アドシルカ</u>)	<u>これらの薬剤</u> の代謝が促進され、血中濃度が低下するおそれがある。	本剤の肝薬物代謝酵素 (CYP3A4) 誘導作用による。

(2) 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
中枢神経抑制剤 フェノチアジン誘導体 バルビツール酸誘導体 トランキライザー トピラマート等 抗ヒスタミン剤 ジフェンヒドラミン等 アルコール	相互に作用が増強されることがあるので、減量するなど注意すること。	相加的中枢神経抑制作用による。
MAO阻害剤		機序不明
三環系抗うつ剤 イミプラミン等 四環系抗うつ剤 マプロチリン等	(1) 相互に作用が増強されることがあるので、減量するなど注意すること。 (2) これらの抗うつ剤の血中濃度が低下することがある ^{1B)} 。	(1) 相加的中枢神経抑制作用による。 (2) 本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用による。
メチルフェニデート	本剤の血中濃度が上昇することがあるので、本剤を減量するなど注意すること。	メチルフェニデートが肝代謝を抑制すると考えられている。
バルプロ酸	(1) 本剤の血中濃度が上昇し、作用が増強されることがある。 (2) バルプロ酸の血中濃度が低下することがある ^{1B)} 。	(1) バルプロ酸が肝代謝を抑制する。 (2) 本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用による。
クロバザム	(1) 本剤の血中濃度が上昇することがある。 (2) クロバザムの血中濃度が低下することがある ^{1B)} 。	(1) 機序不明 (2) 本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用による。
イリノテカン	イリノテカンの活性代謝物の血中濃度が低下し、作用が減弱することがあるので、併用を避けることが望ましい ¹⁾ 。	本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用による。
主にCYP3A4で代謝される薬剤 アゼルニジピン イマチニブ インジナビル カルバマゼピン サキナビル シクロスポリン タクロリムス フェロジピン ベラパミル モンテルカスト等 副腎皮質ホルモン剤 デキサメタゾン等 卵胞ホルモン剤・黄体ホルモン剤 ノルゲストレル・エチニルエストラジオール等 <u>PP55阻害剤</u> <u>タダラフィル</u> (<u>シルデナフィル</u>)、 <u>シルデナフィル</u> 、 <u>バルデナフィル</u>	これらの薬剤の血中濃度が低下し、作用が減弱することがあるので、用量に注意すること ^{1B)} 。	
アミノフィリン水和物 クロラムフェニコール テオフィリン トロピセトロン バロキセチン フレカイニド		
グリセオフルビン		本剤の消化管ぜん動運動亢進作用によるグリセオフルビンの吸収阻害が考えられている。
ラモトリギン <u>ズルニシタ</u>	これらの薬剤の血中濃度が低下することがある ^{1B)} 。	本剤がこれらの薬剤のグルクロン酸抱合を促進する。
ドキシサイクリン	ドキシサイクリンの血中濃度半減期が短縮することがある。	本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用による。
クマリン系抗凝血剤 ワルファリン	クマリン系抗凝血剤の作用が減弱することがあるので、通常より頻回に血液凝固時間の測定を行い、クマリン系抗凝血剤の用量を調整すること。	

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
利尿剤 チアジド系降圧利尿剤等	起立性低血圧が増強されることがあるので、減量するなど注意すること。	機序は不明であるが、高用量の本剤は血圧を低下させることがある。
アセタゾラミド	クル病、骨軟化症があらわれやすい。	本剤によるビタミンDの不活性化促進、又はアセタゾラミドによる腎尿細管障害、代謝性アシドーシス等が考えられている。
※ アセトアミノフェン	本剤の長期連用者は、アセトアミノフェンの代謝物による肝障害を生じやすくなる。	本剤の肝薬物代謝酵素誘導作用により、アセトアミノフェンから肝毒性を持つN-アセチル-p-ベンゾキノニンイミンへの代謝が促進されると考えられている。
セイヨウオトギリソウ (St. John's Wort、セント・ジョーンズ・ワート)含有食品	本剤の代謝が促進され血中濃度が低下するおそれがあるので、本剤投与時はセイヨウオトギリソウ含有食品を摂取しないよう注意すること。	セイヨウオトギリソウの肝薬物代謝酵素誘導作用によると考えられている。

注）：本剤を減量又は中止する場合には、これらの薬剤の血中濃度の上昇に注意すること。

4. 副作用 本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

●重大な副作用（頻度不明）

- ※ 1) 皮膚粘膜眼症候群(Stevens－Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)、紅皮症(剥脱性皮膚炎) 観察を十分に行い、発熱、紅斑、水疱・びらん、痒痒感、咽頭痛、眼充血、口内炎等の異常が認められた場合には、投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。
- ※ 2) 過敏症症候群 初期症状として発疹、発熱がみられ、さらにリンパ節腫脹、肝機能障害等の臓器障害、白血球増加、好酸球増多、異型リンパ球出現等を伴う遅発性の重篤な過敏症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。なお、ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)等のウイルスの再活性化を伴うことが多く、発疹、発熱、肝機能障害等の症状が再燃あるいは遷延化することがあるので注意すること。
- 3) 依存性 連用により薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、用量を超えないよう慎重に投与すること。また、連用中における投与量の急激な減少ないし投与の中止により、不安、不眠、けいれん、悪心、幻覚、妄想、興奮、錯乱又は抑うつ状態等の禁断症状があらわれることがあるので、投与を中止する場合には、徐々に減量するなど慎重に行うこと。
- ※ 4) 顆粒球減少、血小板減少 観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- ※ 5) 肝機能障害 AST（GOT）、ALT（GPT）、γ-GTPの上昇等を伴う肝機能障害があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- ※ 6) 呼吸抑制 観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

●その他の副作用

種類／頻度	頻度不明
過敏症 ^{注1)}	猩紅熱様発疹、麻疹様発疹、中毒疹様発疹
血液 ^{注2)}	血小板減少、巨赤芽球性貧血
肝臓 ^{注3)}	AST（GOT）・ALT（GPT）・γ-GTPの上昇等の肝機能障害、黄疸
腎臓 ^{注4)}	蛋白尿等の腎障害
精神神経系	眠気、アステリクシス(asterixis)、眩暈、頭痛、せん妄、昏迷、鈍重、構音障害、知覚異常、運動失調、精神機能低下
消化器	食欲不振
骨・歯	クル病 ^{注5)} 、骨軟化症 ^{注5)} 、歯牙の形成不全 ^{注5)} 、低カルシウム血症
内分泌系	甲状腺機能検査値(血清T ₄ 値等)の異常
その他	血清薬酸値の低下、ヘマトポルフィリン尿 ^{注6)} 、発熱

注1) 投与を中止すること。

注2) 投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

注3) 観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

注4) 連用によりあらわれることがある。

注5) 連用によりあらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常（血清アルカリフォスファターゼ値の上昇、血清カルシウム・無機リンの低下等）があらわれた場合には、減量又はビタミンDの投与等適切な処置を行うこと。

5. 高齢者への投与

少量から投与を開始するなど慎重に投与すること。なお、投与を中止する場合には、徐々に減量するなど慎重に行うこと。〔高齢者では、呼吸抑制、興奮、抑うつ、錯乱等があらわれやすい。〕（「2.重要な基本的注意」の項参照）

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

(1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性（母体のてんかん発作頻発を防ぎ、胎児を低酸素状態から守る）が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること〔妊娠中に本剤を単独、又は併用投与された患者の中に、奇形を有する児（口唇裂、口蓋裂、心奇形、大動脈縮窄症等）を産出した例が多いとの疫学的調査報告がある〕。

(2) 妊娠中の投与により、新生児に出血傾向、呼吸抑制等を起こすことがある。

(3) 分娩前に連用した場合、出産後新生児に禁断症状（多動、振戦、反射亢進、過緊張等）があらわれることがある。

(4) 妊娠中の投与により、薬酸低下が生じるとの報告がある。

(5) 授乳婦への投与は避けることが望ましいが、やむを得ず投与する場合には、授乳を避けさせること。〔ヒト母乳中へ移行し、新生児、乳児に傾眠、哺乳量低下を起こすことがある。〕

7. 過量投与

(1) 症状：中枢神経系及び心血管系抑制。血中濃度40～45μg/mL以上で眠気、眼振、運動失調が起り、重症の中毒では昏睡状態となる。呼吸は早期より抑制され、脈拍は弱く、皮膚には冷汗があり、体温は下降する。肺の合併症や腎障害の危険性もある。

(2) 処置：呼吸管理。消化管に薬物が残留している場合は、胃洗浄、活性炭投与を行う。また、炭酸水素ナトリウム投与による尿アルカリ化、利尿剤投与により薬物の排泄を促進させる。重症の場合は、血液透析や血液灌流を考慮すること。

8. その他の注意

(1) ラット及びマウスに長期間大量投与（ラット：25mg/kg、マウス：75mg/kg）したところ、対照群に比較して肝腫瘍の発生が有意に増加したとの報告がある。

(2) 血清免疫グロブリン(IgA、IgG等)の異常があらわれることがある。

- ※ (3) 海外で実施された複数の抗てんかん薬における、てんかん、精神疾患等を対象とした199のプラセボ対照臨床試験の検討結果において、自殺念慮及び自殺企図の発現のリスクが、抗てんかん薬の服用群でプラセボ群と比較して約2倍高く（抗てんかん薬服用群：0.43%、プラセボ群：0.24%）、抗てんかん薬の服用群では、プラセボ群と比べ1000人あたり1.9人多いと計算された（95%信頼区間：0.6-3.9）。また、てんかん患者のサブグループでは、プラセボ群と比べ1000人あたり2.4人多いと計算されている。

【薬効薬理】 ^{1～2)}

1. 催眠作用

フェノバルビタールは長時間作用型のバルビツール酸誘導体で、大脳皮質および脳幹網様体の上行性賦活系に対して強く作用し、皮質ニウロンの賦活を抑制することが認められている。

2. 抗けいれん作用

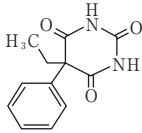
フェノバルビタールは、催眠作用を発現するより少量で抗けいれん作用を発揮する。

【有効成分に関する理化学的知見】

一般名：フェノバルビタール

化学名：5-Ethyl-5-phenylpyrimidine-2,4,6(1*H*, 3*H*, 5*H*)-trione

構造式：



分子式：C₁₂H₁₂N₂O₃
分子量：232.24

融 点：175～179℃
性 状：白色の結晶又は結晶性の粉末で、においはなく、味は苦い。

N,N-ジメチルホルムアミドに極めて溶けやすく、エタノール(95)、アセトン又はピリジンに溶けやすく、ジエチルエーテルにやや溶けやすく、水に極めて溶けにくい。水酸化ナトリウム試液又はアンモニア試液に溶ける。
本品の飽和水溶液のpHは5.0～6.0である。

【取扱い上の注意】

〈注意〉 注意－習慣性あり

注意－医師等の処方せんにより使用すること。

劇薬であり、向精神薬であるので特に注意すること。

〈配合禁忌〉 湿潤；炭酸アルカリ。

湿度、温度変化で湿潤；アンチピリン、サリチル酸ナトリウムテオブロミン、抱水クロラール、レゾルシン。
変色：ジギタリス製剤。

【主要文献】

- 1)伊藤 宏：薬理学 第4改訂 P73～74(1971)
- 2)田中 潔：現代の薬理学 第3改訂 P83(1994)



発売元

吉田製薬株式会社
東京都中野区中央5-1-10



製造販売元

シオエ製薬株式会社
兵庫県尼崎市潮江3丁目1番11号